

## 国府所在地一覽表の作成について

木下 良

### 一 はじめに

国府は律令国家体制においては、行政はもとより軍事・交通・経済・宗教・文化など、あらゆる面での地方中心地としての役割りを果たしていたから、律令国家の地方制度を理解するために、また各地方における地域構造を解明するためにも、それぞれの国府の所在位置を知ることが、まず第一に必要とされる。

そこで、古くは辻善之助が国府と国分寺との関係位置を考察<sup>①</sup>するために、自ら「国府及国分寺の位置」一覽表<sup>②</sup>を作製し、また坂本太郎が国府と駅路<sup>③</sup>および駅家<sup>④</sup>との関係について論じ、あるいは深谷正秋が条里遺構の分布<sup>⑤</sup>を論ずるにあたって、国府・国分寺の付近に条里施行が見られることを指摘し、さらに浅香幸雄が各国内における国府の位置を検討している<sup>⑥</sup>が、これらの場合も既成の国府所在地一覽表に従って論をすすめている。

さて、諸国国府の所在は、江戸時代後期頃から各地における地誌編纂にも関係して検討がすすめられるようになったが、これらの成果は『日本国郡沿革考』『大日本史・国郡志』などに集約されることができよう。

明治の中頃から盛んになった歴史地理学は、明治三二年の日本歴

史地理学会の創立となり、また吉田東伍『大日本地名辞書』の刊行をみちびいたが、これらの研究活動によって国毎に国府所在地のより詳細な検討がすすめられるようになった。

昭和八年に刊行された三坂圭治『国防国府の研究』は、方八町よりなる国府域の四至、府域内における国府の位置、駅路の通過状況、水運との関係、国分寺・総社との関係位置などを明らかにしたこと、国府研究の一画期となり、特に地理学の側からの国府研究に大きな刺戟をあたえた。すなわち、既に条里研究によって律令国家体制の究明に貢献してきた実績をもつ地理学では、条里研究と同様の方法によって国府研究が進められることになり、国防を参考にし、諸国府の立地と形態が論じられるようになった。ここにいたって、従来の漠然とした国府所在地比定から、確然とした府域比定へとすすみ、国府の中心機関である国庁の位置までが考定できるようになったもので、米倉二郎<sup>⑦</sup>・藤岡謙二郎<sup>⑧</sup>などによる一連の研究が行われた。

藤岡は伊勢において、また鏡山猛は筑後<sup>⑨</sup>において、それぞれ国府跡の一部発掘を試みたが、国庁の建物配置の基本型を明確にしたことで、昭和三八〜四〇年の近江国府の発掘調査<sup>⑩</sup>はきわめて重要な意義がある。都城の朝堂院や大宰府庁を小規模簡単にしたようなその国庁の建物配置は、陸奥国府でもある多賀城のそれともよく類似し、多賀城が本質的には行政官庁であろうとする見解<sup>⑪</sup>を醸成し、出雲国府の発掘調査<sup>⑫</sup>にも近江国庁を基範として適用するなど、大きな影響を示している。また、それまではなお疑問が抱かれていた、国庁における瓦の使用も確定し、以来瓦の出土を考慮しながら国府

の調査が進められるようになったことも重視される。

この他、周防<sup>13</sup>・上野<sup>14</sup>・肥後<sup>15</sup>・伊豆<sup>16</sup>・和泉<sup>17</sup>・薩摩<sup>18</sup>・佐渡<sup>19</sup>・常陸<sup>20</sup>・下野<sup>21</sup>・美作<sup>22</sup>・因幡<sup>23</sup>・伯耆<sup>24</sup>・河内<sup>25</sup>・肥前<sup>26</sup>などで、国府跡の発掘調査が実施され、その一部は継続中であるが、これらの調査によって律令盛行期の国府跡が明確になればなるほど、律令衰退期乃至崩壊期における国府の状態が問題となってくる。日本史学の側からは吉村茂樹の国司制度の崩壊<sup>27</sup>についての研究を始めとして、国府機能の変遷が論じられているが、これに対応する国府の形態的な変化や、所在地移転についてはまだ十分に明らかにはされていないので、これらが今後の主要な課題となってくるであろう。例えば発掘調査された近江・肥後・下野の国府は地震・洪水などによって潰滅した後、他地に移されたことが明らかとなっているからである。筆者自身は研究の重点をこの面においており、若干の論を<sup>28</sup>展開してきた。

各国府の移転関係が明らかにされなければ、奈良時代における国府と国分寺、一〇世紀初頭における『延喜式』駅路と国府との関係など、時期を限定しての論考は無意味になることになるが、従来の国府所在地一覧表はこの点においてはたして十分であろうか。

## 二 既往の国府所在地一覧表

全六六国二島の国府所在地を一覧表に示したものはこれまでに数多く作製され、表示しないまでも全国府の所在を論じた研究書もあるが、ここではたまたま筆者が入手した左記の諸表について若干の論評を加えてみたい。

A 辻善之助「国府及国分寺の位置」『歴史地理』一一三、明治三二年。<sup>29</sup>

本表は「国府及国分寺の位置」を示す、六〇〇万分の一地図と表裏をなすもので、これに基づいて「国分寺の位置について」と題する論考がなされている。辻は本表の末尾に、「以上国府及国分二寺の位置皆拠る所あり考証する所ありと雖も、一々しるすに違あらず、凡て之を略す、国府国分二寺共にその位置疑はしきもの及未詳なるもの甚多し、大方の諸賢殊にはその各国博雅の士、垂教を吝むなくば、ただに余輩の幸のみにあらざるなり」と結んでいるが、「国分寺の位置について」の論文では、国分寺と国府との位置関係は深く究むべき必要があるとして、ひろく各国々志をあさってこれらの旧址を求めたことを記している。国分寺との位置関係を中心に考える表であるから、奈良時代における国府所在地が問題にされるのであるが、山城・摂津については移転関係を示している。

国府と国分両寺との関係位置については、国府を中央に僧寺と尼寺とは互いに反対方向に置かれたものであろうとする、江戸時代以来の考えに従っているのは、事実としては現在では全く認められないうことであるが、当時は僧寺はともかくとして、国府と尼寺の具体的な所在が不明のまま、今の規定などから想像されたものであろう。

国府の所在地で、現在の比定地と特に異なるところは、遠江・上総・若狭・能登・丹後・筑後・肥後など、多くは府中と称する地で、国府と府中とを同義語と考えていたことにもとづく結果であるが、府中を中世的政治都市として規定する考え方<sup>30</sup>の深まった現在では、これらを後世における国府の移転地として検討する余地を示すもの

で、爾余の表におけるように一概に捨て去るべきではないであろう。ただし、出羽の比定地は現在ではその根拠は認め難く、出雲についても別地に古代から中世にかけての遺構が検出されたので論外である。

B 八代国治・早川純三郎・井野辺茂雄編『国史大辞典』吉川弘文館「国府」項、明治四一年。

本表はA表とは伊賀・上総・飛弾・丹波・淡路・肥後の諸国について国府所在比定地を異にしているが、基本的にはA表を基準にして、これを敷衍し、若干の新見解を加えたものと見られる。すなわち、摂津・遠江・駿河・常陸・播磨・対馬については「府中」などの国府関係旧称地名を、また常陸・出羽については郡名が変遷しているため旧郡名を、それぞれ括弧でくくって付記するなどの配慮をし、山城・陸奥では国府の移転関係を追加している。『国史大辞典』は、大正四年に増訂、大正一四年に再度の大増訂をほどこし、永く利用されたので、本表もあまねく知られたことと思われる。

C 角田文衛「国分寺の設置」所収「国府・国分寺位置表」『国分寺の研究』上、考古学研究会、昭和一三年。

本表はA表と同様に、国府と国分両寺との関係位置を検討する立場から、奈良時代と平安時代の国府所在地を区分できるものは明確に区分し、これらの位置もできるだけ詳細に記している。また、多くの研究者達のそれぞれ現地に則しての研究・調査による新知見を採用しているために、きわめて斬新なものとなっている。特に山城・相摸・信濃・上野・下野・出羽・能登・紀伊・筑前・筑後・肥後・日向・杵岐などについては全く新しい見解を示し、また従来特

にとりあげられることのなかった多嶽の国府（島府）と島分寺の所在を検討していることも注目される。これらの中でも、下野・出羽・杵岐については、現在の時点から見ても、これに従わない後統の諸表より優れた見解を示すものとして高く評価したい。

ただ、本書が五〇〇部限定出版の高価本であったためか、この表もあまり知られないまま、後々まで旧態然とした表が一般に使用されていたことはまことに残念であった。

D 上田三平「国府」『国史辞典』富山房、昭和一八年。

本表はC表より後に作製されたが、C表の成果はまったく利用されず、その内容はほぼB表に従って、遠江・淡路・日向を異にし、出羽の移転関係を付加したものの、B表にみられた山城・摂津・陸奥などの国府移転を記すことなく、また国府所在も大部分は市町村名を記すにすぎない。『延喜式』の「行程・大小・遠近・管郡数」、「和名抄」の「国府所在郡名」を付記しているが、特に国府所在をこれらと対応させるものではない。

既に大正初年以來、相摸①・信濃②・丹後③などの国府移転について、かなりの論議が行なわれ、史的にも山城・摂津・出羽・但馬については国府移転の事実が知られていたにもかかわらず、これらの国府移転に何程の言及もないことはものたりない。

E 地方史研究協議会編『地方史研究必携』「地方行政制度（国郡里及国衙）」岩波書店、昭和二七年。

F 大塚史学会編『郷土史辞典』「国府一覽」朝倉書店、昭和三〇年。

G 門脇禎二「国府」『日本歴史大辞典』河出書房、昭和三一年。

以上の三表はいずれもその内容はまったくD表に従っており、格別の新味は認められないが、それぞれ普及して広く利用された。

H 吉川弘文館編集部『歴史手帳』「国府・国分寺・一宮・総社一覽」吉川弘文館、第七一八版、昭和三六、四七年。

『歴史手帳』は昭和三〇年末に第一版（一九五六年版）を発行し、本表はその第一八版まで付録として収められたものであるが、この間にはかなりの改訂のあとがうかがわれる。

本表の特色は、国分寺所在地、総社・一宮の社名を併記して、国府とこれら社寺との関係を見ることができるようになっている。国府移転については、山城・相模・信濃・出羽についてとりあげるが、摂津・但馬・肥後についてはふれていない。国府所在地の表記についても、小字地名までを記すものと市町村名にとどまるものなどの精粗がある。当初の作製に当っては、各都府県教育委員会などの教示を得たとのことで、これら各地の当事者の国府跡に対する認識の差から生じたものであろうか。

『歴史手帳』は日本史研究者間には広く利用されるので、利用者からの新事実の指摘などもうけて、また町村合併による所在地表記の変更なども丹念に改訂され、特に甲斐・近江・下野・丹波・出雲・長門などは新しい調査・研究の結果がとりいれられており、良心的な編集とすることができている。それだけに一九七四年度版以降にその収録をとりやめているのは残念なことである。

本表の欠点は所在地名の改訂に際して、現地を知らないまま、町村合併の結果を机上で処理したために、必ずしも適切な表記とはなっていないものがあることである。例えば、土佐の国府と国分寺

はいずれもその所在地を南国市後免町としているが、実際には国府は同市比江、国分寺は同市国分にあつて、後免ではない。おそらく、国府・国分寺のある旧国分村が後免町に合併したので、後免町比江・後免町国分とされ、さらに後免町を中心に南国市が成立してからは南国市後免町として、以下の地名を省略した結果であろう。他にも改訂に際して、旧版には記されていた小字地名などの小地名を削除したために、所在地が不明確になったものがある。

I 坂本太郎監修『日本史小辞典』「国府・国分（尼）寺一覽」山川出版社、昭和三二年。

本表はその「備考」によれば、C・D・Hなどの諸表を参考にし、適宜取捨し、新知見を加味して作製したとされており、C表の成果をとりいれた数少ない表の一である。国府の所在地は多くはC表に従がい、移転についてはH表と同様である。

J 藤岡謙二郎編『日本歴史地理ハンドブック』「国府・国分寺の所在地」大明堂、昭和四一年。

本表は地理学の側から国府研究を大きく進展させた藤岡の編書に収録されているものであるが、その国府所在地比定はほぼH表に従っており、あまり独自性は認められない。部分的には、大和・摂津・備後・安芸について国府の移転関係が追加され、丹波については筆者が昭和三九年に発表した新説<sup>34</sup>を採用するなどの変化がみられるが、一方では長門について既に昭和三一年に藤岡を代表として実施された「国府の歴史地理学的研究」<sup>35</sup>に長門を分担した小野忠熙の見解と異なり、また三河については既に発表されている藤岡自身の所説<sup>36</sup>と異なることなどは、藤岡の編書としては理解し難い。結

局、本表には藤岡を中心とする国府研究の成果は十分にはもりこまれていない。従って、後の藤岡の著書『国府』<sup>27</sup>とはかなりの差異が認められる。

K 木下良「国府所在比定地一覧」福山敏男「地方の官衙」付載、『日本の考古学』Ⅷ歴史時代・下）河出書房、昭和四二年。

本表は福山の依頼によって、筆者が作製したもので、『和名抄』『伊呂波字類抄』『拾芥抄』その他の文献に示される国府所在との対応を中心に、諸比定地をできるだけ多く列挙した。従って、国府の移転関係も一八国についてとりあげている。その後の研究によって、『拾芥抄』の国府所在は河内一国を除いて、他は『和名抄』『伊呂波字類抄』を踏襲したにすぎないことが判明し、また各地の調査の進展によって、所在比定地を改める必要がある。

L 斎藤忠「国府一覧」『総合国史研究要覧』歴史図書館社、昭和四五年。

本表は考古学の側から国府跡の調査・研究に携わった斎藤の作製になるだけに、和泉・常陸・近江・上野・陸奥・佐渡・出雲・周防・薩摩については発掘調査の成果もとり入れており、所在地も詳細である。本表も『延喜式』の「大小・管郡数」、『和名抄』の「所在郡名」を記しているが、比定地との対応関係は明確ではない。本表の特色は参考となる国府関係の現存地名を付記していることであるが、その時代認定が明確ではなく、また備考として移転説のあることをあげる国もあるが、相摸・信濃・出羽・肥後以外については移転関係は明確にしていない。しかし、本表は藤岡の著書『国府』の研究成果なども参考にして、作製者自身の実地調査による知見が

豊富にもられており、独自性のあるきわめて価値の高い一表となっている。

M 鈴木雅史「国府・国分寺・国分尼寺表」遠藤元男監修『日本古代史事典』朝倉書店、昭和四九年。

本表は現在においては最も新しく作られた表であるが、これも作製者に特別の方針はなく、従来の諸表を適宜取捨して作製したものであるから格別の新味を見ることはできない。H表を基本にして、国府と国分両寺とを対比する表であるだけに、C表の成果を部分的にとり入れている。

以上の諸表を通観して感じることは、A表からM表まで前後七五年を経過して、内容には格別の進展が認められないことである。A・C・I・J・Mの諸表は国府と国分寺とを対比し、D・J・K・Lの諸表は『和名抄』の国府所在郡を付記し、さらにH表は総社・一宮の社名に付して、それぞれ国府所在に關係して考慮すべき事柄を示唆しているが、C表とK表を除いては特にこれらの対応関係を明確にしてはいない。

### 三 移転関係を主とする国府所在地一覧表の作製

国府の移転関係をできるだけ明確にするためには、文献はもとより、関係社寺や関係地名の時代比定を確定する必要がある。筆者は先学の研究成果に基づき、自らの現地調査による知見を加味しつつ、ほほ次のような観点を得ることができた。それぞれの論証は既に試



河内 大阪府藤井寺市国府

和泉 大阪府和泉市府中町(米倉二郎、藤岡謙二郎)

摂津 大阪府大阪市東区北国分町

池田市?

京橋・石町

大阪市大淀区长柄?

大阪市住吉区

志紀 和

大泉

和泉 和

東成

西成

豊島

西成 伊

住吉

衣縫廃寺・総社、一部発掘調査  
(拾芥抄)

和泉寺・総社、一部発掘調査

(日本後期)延暦二十四年(八〇五)「江頭」

(日本紀略)天長二年(八二五)「豊島郡家以南」

(続日本後紀)承和十一年(八四四)「鴻臚館」

(撰津国大計帳案)保安元年(一一二〇)「住吉郡在国府」

〔東海道〕

伊賀 三重県上野市印代(福永正三)

伊勢 三重県鈴鹿市広瀬? (藤岡謙二郎)

志摩 三重県志摩郡阿児町国府

尾張 愛知県稲沢市松下町・国府宮町(水野時二)

丹羽郡岩倉町国衙?

参河 愛知県豊川市国府町(木下 良)

八幡町上宿?

遠江 静岡県磐田市見付(藤岡謙二郎)

駿河 静岡市安東(藤岡謙二郎)

伊豆 静岡県三島市芝本町鷹部屋(軽部慈恩)

日の出町長谷?

甲斐 山梨県東山梨郡春日居村国府・鎮目(木下 良)

阿拜 和

鈴鹿 和

英虞 和

中島 和

丹羽

宝飯 和

豊田 和

磐田 和

安部 和

田方 和

山梨 和

寺本廃寺・守宮社

国分寺

古瓦出土、一部発掘調査

古瓦出土、一部発掘調査

国分寺

稲沢廃寺・国分寺・総社

守公神社

国分寺・総社

総社

市ヶ原廃寺・塔ノ森廃寺・国分寺、一部発掘

総社

寺本廃寺・守宮社

〔東山道〕

相摸	山梨県東八代郡八代町？ " " 御坂町国衙	八代 <small>和</small> <small>伊</small> 山梨	
相摸	神奈川県小田原市永塚（木下 良） " " 平塚市？（沼田頼輔） " " 中郡大磯町国府本郷	足柄 <small>和</small> 大住 <small>和</small> 余綾 <small>和</small> 多磨 <small>和</small>	国府津・下曾我遺跡・光海遺跡・千代廃寺、一部発掘 〔色葉字類抄〕（前田本）平塚八幡宮・高林寺遺跡 総社・守公神・国府祭
武威	東京都府中市宮町大国魂社境内（字野信四郎）	多磨 <small>和</small>	古瓦出土・国分寺・京所廃寺・総社
安房	千葉県安房郡三芳村府中（木下 良）	平群 <small>和</small> 市原 <small>和</small>	国分寺・総社 府中・古甲
上総	千葉県市原市総社（藤岡謙二郎） " " 郡本？ " " 能満？	" " <small>和</small> 葛飾 <small>和</small> 茨城 <small>和</small>	府中 国分寺・総社、「博士館」墨書土器 国分寺・総社、国庁跡発掘 税所屋敷
下総	千葉県市川市国府台	葛飾 <small>和</small> 茨城 <small>和</small>	国分寺・総社、「博士館」墨書土器 国分寺・総社、国庁跡発掘
常陸	茨城県石岡市石岡（豊崎 卓） " " 茨城？	" " <small>和</small> " " <small>和</small>	税所屋敷
近江	滋賀県大津市瀬田神領町（米倉二郎、藤岡謙二郎） " " " 橋本町上ノ畑？（木下 良）	栗本 <small>和</small> <small>伊</small> " " <small>和</small> " " <small>和</small>	神谷廃寺・瀬田廃寺、国庁跡発掘 古瓦出土
美濃	岐阜県不破郡垂井町府中（藤岡謙二郎）	不破 <small>和</small> <small>伊</small>	古瓦出土・国分寺
飛驒	岐阜県高山市岡本町？ " " 吉城郡国府町広瀬？	大野 <small>和</small> <small>伊</small> 荒城 <small>和</small>	国分寺・総社 国府神社
信濃	長野県上田市常入字万所？ " " 松本市惣社・新井（堀内千万蔵、木下 良） " " 長野市後町 " " 松本市筑摩？	小泉 <small>和</small> 筑摩 <small>和</small> <small>伊</small> 水内 <small>和</small> 筑摩 <small>和</small>	国分寺 総社 〔明月記〕安貞元年（一二二七）「善光寺近辺号後庁」 府中・府八幡宮

(諏訪)

長野県松本市惣社・新井？

群馬県前橋市元総社(尾崎喜左雄、金坂清則)

碓氷郡松井田町国衙？

栃木県栃木市田字大房地(大和久震平、金坂清則)

惣社南部(大島延次郎、金坂清則)

国府？

大宮？(木下良)

惣社字府中？

陸奥

福島県郡山市？

福島市宮代？

宮城県多賀城市市川

岩沼市岩沼？

福島県いわき市平菅波

福島県須賀川市下宿

山形県東田川郡藤島町古郡？

酒田市城輪？

東田川郡藤島町藤島？

秋田県平鹿郡増田町平鹿？

(北陸道)

若狭

福井県小浜市太興寺？

府中

越前

福井県武生市市街部(斉藤優、藤岡謙二郎)

加賀

石川県小松市古府

筑摩

群馬(和)伊

碓氷

都賀(和)伊

古国府

勝光寺

印鑰社

安積

信夫

宮城(和)伊

名取

磐城

磐瀨

出羽

飽海

出羽(和)伊

平鹿(和)伊

古瓦出土・国分寺・総社、一部発掘

古国府・古瓦出土・宮野辺神社、一部発掘

勝光寺

印鑰社・方八丁の区画

[万葉集]三八〇七

国府台・方格地割

多賀城跡・多賀城廃寺・奏社、発掘調査中

竹駒神社・総社

夏井廃寺・大国魂社

上人壇廃寺・頭国魂社

国分、(三代実録)仁和三年(八八七)「出羽郡井口地」？

城輪柵発掘調査中、「旧」」「旧府近側高敞之地」

六所神社

遠敷(和)伊

総社

丹生(和)伊

能美(和)伊

太興寺・国分寺

総社

深草廃寺・総社

十九堂廃寺・総社

能登 石川県金沢市古府？  
石川県七尾市古府  
" " 国下？  
" " 府中

越中 富山県高岡市伏木古府（古岡英明）  
新潟県新潟市？  
" 上越市高田・新井市付近  
" 新井市国賀？（田中圭一・山本仁）  
" 中頸城郡板倉町国川？（田中圭一・山本仁）  
" 上越市直江津本町

佐渡 新潟県佐渡郡真野町四日町  
" " 竹田？（田中圭一・山本仁）  
" " 羽茂町？

〔山陰道〕

丹波 京都府亀岡市千代川（木下良）  
" 船井郡八木町屋賀

丹後 京都府与謝郡岩滝町男山（坂口慶治）  
" 舞鶴市西舞鶴？  
" 宮津市府中

但馬 兵庫県出石郡出石町？  
" 城崎郡日高町？  
" " 土居・府市場

因幡 鳥取県岩美郡国府町中郷・庁  
伯耆 鳥取県倉吉市国府

加賀

能登 和 伊

古瓦出土・国分寺・総社  
千野廃寺  
印鑰社

射水 和 伊

御亭角廃寺・国分寺

蒲原

頸城 和 伊

上越市本長者原遺跡（国分寺？）

" " 和 伊

御館遺跡・五智国分寺・府中八幡社

雑太 和

若宮遺跡、一部発掘調査  
檀風城跡、一部発掘調査

羽茂 和 伊

桑田 和 伊  
桑寺跡

宗社、〔吉富庄古絵図〕「国八庁」

与謝 和 伊  
慈光寺跡・国分寺（奈良期）

加佐 和 伊  
国分寺（平安期）・大光寺

与謝 和 伊  
飯役（印鑰）社

出石 和 伊  
国分寺

気多 和 伊  
総社、〔日本後紀〕延暦廿三年（八〇四）「気多郡高田郷」

" " 和 伊  
大権寺廃寺・国分寺・総社跡、発掘調査中

法美 和 伊  
古瓦出土・国分寺・国庁裏神社、発掘調査中

久米 和 伊

出雲 島根県松江市大草町(恩田清)  
 石見 島根県浜田市下府  
 隠岐 島根県隠岐郡西郷町下西

意宇 和 伊 古瓦出土・国分寺・総社、発掘調査  
 那賀 和 伊 下府廃寺・国分寺・総社  
 周吉 和 伊 権徳寺廃寺・総社

(山陽道)

播磨 兵庫県姫路市国府寺町(木下良)  
 美作 岡山県津山市総社  
 備前 岡山県岡山市国府市場  
 " " 三門?(大槻如電)  
 " " 国府市場  
 備中 岡山県総社市金井戸北国府・南国府  
 備後 広島県深安郡神辺町?  
 " 府中市鶴飼町(豊元国)  
 安芸 広島県東広島市西条町?(米倉二郎)  
 " 安芸郡府中町  
 周防 山口県防府市東佐波令  
 長門 山口県下関市長府宮の内(小野忠熙)

飾磨 和 伊 市之郷廃寺・総社  
 苫東 和 伊 古瓦出土・総社、一部発掘調査  
 上道 和 伊 賞田廃寺・成光寺跡・幡多廃寺・国長社  
 御野 和 伊 国守  
 上道 和 伊 総社  
 賀夜 和 伊 賀陽寺跡  
 安那 和 伊 国分寺  
 葦田 和 伊 古瓦出土・総社  
 賀茂 和 伊 国分寺  
 安芸 和 伊 総社・下岡田遺跡、発掘調査  
 佐波 和 伊 多々良廃寺・国分寺・総社、発掘調査  
 豊浦 和 伊 国分寺・総社

(南海道)

紀伊 和歌山県那賀郡?  
 " 和歌山市府中  
 淡路 兵庫県三原郡三原町市十一ヶ所  
 " " 神代国衙  
 阿波 徳島県徳島市国府町府中  
 讃岐 香川県坂出市府中  
 伊予 愛媛県今治市富田(片山才一郎)

那賀 和 伊 国分寺  
 名草 和 伊 古瓦出土・府守社  
 三原 和 伊 国分寺・総社  
 " " 伊 国分寺・総社  
 名東 和 伊 国分寺・総社・印鑰社  
 阿野 和 伊 古瓦出土・開法寺跡・印鑰社  
 越智 和 伊 国分寺

土佐 高知県南国市比江

(北海道)

長岡 比江廃寺・国分寺・総社

大宰府 福岡県筑紫郡太宰府町観世音寺大裏(鏡山猛)

筑前 福岡県筑紫郡太宰府町観世音寺来木?(鏡山猛)

筑後 福岡県久留米市合川町枝光(鏡山猛)

豊前 福岡県京都郡豊津町国作・惣社(木下良、日野尙志)

豊後 大分県大分市古国府本町(木下良)

肥前 佐賀県佐賀郡大和町久池井(米倉二郎)

肥後 熊本県熊本市出水町国府(松本雅明)

日向 宮崎県西都市上妻(木下良)

大隅 鹿兒島県国分市府中

薩摩 鹿兒島県川内市御陵下町(平田信芳)

杵岐 長崎県杵岐郡石田町興触(山口麻太郎)

対馬 長崎県下県郡蔵原町

(多) 鹿兒島県西之表市西之表榕城(日野尙志)

御笠 都府楼跡・学院院跡・観世音寺、発掘調査中

御笠 遠賀軍団印出土・国分寺

御笠 王城神社・榎寺

御井 古瓦出土・印鑰社跡、一部発掘調査

仲津 府中・印鑰社

京都 駅路跡・国分寺・惣社八幡

仲津 草場神社(在庁屋敷)

大分 宝戒寺跡・総社跡

大分 古瓦出土・印鑰社

佐嘉 府内

佐嘉 古瓦出土・国分寺、発掘調査中

小城 印鑰社、(鎮西要略)文和二年「府中」、文明元年「国府」

佐麻 古瓦出土・国分寺、発掘調査

益城 七所宮

飽田 古府中・総社

児湯 古瓦出土・国分寺

那珂 印鑰社

那珂 大光寺

桑原 古瓦出土・守公社・国分寺

高城 古瓦出土・国分寺、一部発掘調査

石田 総社・印鑰社

下県 府中・国分寺

熊毛

#### 四 おわりに

本表はもとより現在の段階での筆者の一試作表にすぎない。全国六六国三島について、一応の現地調査は行なってはみたものの、なお表中に？記号で示される疑問の地も多く、単なる推測にすぎないものも少なくない。特に撰津・出羽については国府移転の記録が残されているにもかかわらず、それらの所在地は確定されていない。また越後と出羽では国分寺跡が未確認であることも、律令期の国府跡想定上の難点となっている。これらについては、偶然の機会による遺跡そのものの発見を待つか、最近急速に明確にされつつある駅路との関係から求めることの可能性があるように思われる。

一方、律令衰退期乃至崩壊期の国府は明瞭な遺構をとどめることはきわめて少ないと思われるので、在庁官人となった地方豪族の動向を見究わめることが必要となり、さらに鎌倉期に入ってから守護所との関係が考慮されよう。これらについては日本史家の教示にまつ所が大きい。

とにかく、国府は古代から中世前期までは存続したので、これらの時代的变化を明確にしなければ、律令期の典型的国府も明瞭にはなし難いことは確実である。

筆者としては、不完全ながらこの一表を提示して、諸賢の批判と是正とにまっして、より完全なものに近づけることを念願するものである。

#### 注

- ① 辻善之助「国分寺の位置について」『歴史地理』一一五、明治三三年。
- ② 辻善之助「国府及国分寺の位置」『歴史地理』一一三、明治三二年。
- ③ 坂本太郎「上代駅制の研究」昭和三年。
- ④ 坂本太郎「国府と駅家」『一志茂樹博士喜寿記念論集』昭和四年。
- ⑤ 深谷正明「条里の地理学的研究」『社会経済史学』六一四、昭和十一年。
- ⑥ 浅香幸雄「国府の位置と相摸国府の三遷」『歴史地理学紀要』二（地域の変遷）昭和三五年。
- ⑦ 米倉二郎「近江国府の位置について」『考古学』六一八、昭和一〇年。「紀伊国府考」『紀州文化研究』三一二、昭和一四年。「国府と条里」『史学研究』五七、昭和二九年。「国府と条里・2」『広島大学文学部紀要』九、昭和三一年。「九州の条里」『九州アカデミー』一、昭和三五年。
- ⑧ 藤岡謙二郎「国府の歴史地理学的研究（抄報）」昭和三三年。「都市と交通路の歴史地理学的研究」昭和三五年。「国府」昭和四四年。
- ⑨ 鏡山猛「筑後国府の調査」『上代文化』三一・三二、昭和三七年。
- ⑩ 水野正好「滋賀県大津市近江国府跡」『日本考古学年報』一八、昭和四五年。
- ⑪ 工藤雅樹「多賀城の起源とその性格」『古代の日本』八・東北、昭和四五年。
- ⑫ 松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』昭和四五年。

- ⑭ 尾崎喜佐雄・松島栄治『上野国府跡発掘調査概報』昭和四一、四四年。
- ⑮ 松本雅明「肥後の国府——託麻国府址発掘調査報告——」『古代文化』一七—三、昭和四一年。
- ⑯ 輕部慈恩「静岡県三島市推定伊豆国府址」『考古学年報』一六、昭和四二年。
- ⑰ 大阪府教育委員会『和泉国府址発掘調査概要』昭和四一年。
- ⑱ 鹿児島県教育委員会『薩摩国府跡・国分寺跡』昭和五〇年。
- ⑲ 真野町教育委員会『佐渡国府緊急調査報告書』一、昭和四三年。
- ⑳ 豊崎卓『常陸国府址発掘調査報告書』昭和四八年。
- ㉑ 大和久震平・埴静夫『栃木県の考古学』昭和四七年、三八六—三八七頁。
- ㉒ 岡山県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』三、「美作国府」昭和四八年。
- ㉓ 鳥取県教育委員会『因幡国府遺跡発掘調査報告書』昭和四八年—五〇年、継続実施中。
- ㉔ 倉吉市教育委員会『伯耆国分尼寺・官衙跡発掘調査概報』昭和五〇年、継続実施中。
- ㉕ 大阪府教育委員会により実施中。
- ㉖ 佐賀県教育委員会により実施中。
- ㉗ 吉村茂樹『国司制度崩壊に関する研究』昭和三二年。
- ㉘ 木下良「国府跡研究の諸問題」『人文地理』二—四、昭和四四年。「国府跡研究のこれから——古代から中世への変遷を主として——」『史学雑誌』八二—二、昭和四八年。
- ㉙ 前掲、注②。
- ㉚ 松山宏『日本中世都市の研究』「府中の成立」昭和四八年。
- ㉛ 沼田頼輔『相模国分寺考附国府及駅路考』『歴史地理』三一—三、大正七年。
- 石野瑛『武相の古代文化』「武蔵・相模両国の国府と国分寺」大正十五年。
- 石野瑛「相摸（大住・余綾）国府址考」昭和八年。
- 沼田頼輔「相摸国府の位置」『ドルメン』二—二、昭和八年。
- 藤沢直枝「信濃国分寺の研究」昭和六年。
- 米倉二郎「信濃における首邑の変遷」『地理論叢』七、昭和一〇年。
- 中谷英雄「信濃国分寺」角田文衛編『国分寺の研究』上、昭和一三年。
- ⑳ 井上通泰「上代歴史地理新考（南海道・山陽道・山陰道・北陸道）」昭和一六年、二八四—二八五頁。
- ㉑ 角田文衛「丹後国分寺」『国分寺の研究』下、昭和一三年。
- ㉒ 木下良「丹波国府址新考」『史朋』四、昭和三九年。
- ㉓ 前掲、注⑧。
- ㉔ 藤岡謙二郎「古代東海三国の地域中心と国府の調査——参河・遠江・駿河の場合——」『立命館文学』二二三、昭和三九年。
- ㉕ 前掲、注⑧。
- ㉖ 木下良「律令時代の国府と王朝時代の国衙」『月刊歴史』一五、昭和四四年。前掲、注⑳。
- ㉗ 木下良「国府跡研究の諸問題——甲斐国府跡をめぐって——」『文化史学』二—、昭和四二年。
- ㉘ 前掲、注⑳。「国府跡のこれから」（「国府と国分寺」）項。
- ㉙ 前掲、注④。
- ㉚ 木下良「肥後国府の変遷について」『古代文化』二七—九、昭和五〇年。「災害による国府の移転」『歴史地理学紀要』一八（災害の歴史地理）昭和五一年、掲載予定。
- ㉛ 木下良「和名類聚抄」等の国府所在郡について『史元』二〇—二一合、昭和五一年、掲載予定。
- ㉜ 前掲、注⑳。
- ㉝ 前掲、注④。「肥後国府の変遷について」。「参河国府跡について」『人文地理』二八—一、昭和五一年、掲載予定。
- ㉞ 木下良「印鑰社について——古代地方官庁跡所在の手掛りとして——」『史元』一七、昭和四八年。

## A Table of the Sites of Kokufu(国府)

Ryo KINOSHITA

Kokufu were the seats of provincial governments in ancient Japan, and also the local centers of industry, traffic, religion, and culture in general.

In the study of ancient Japan, especially of the Ritsuryo (律令) system, the need is keenly felt for a table of those sites.

A number of such tables have been made since 1899, but we have no adequate one except for those prepared for the specific purpose of showing the relation between Kokufu and Kokubunji (国分寺) in the 8th century.

Though Kokufu often changed their sites in the course of a few centuries, none of the above tables clarify such removals.

The writer has been studying the removal of Kokufu sites, and here presents a table showing as clearly as possible the removals which occurred in each province from the 7th to the 14th century.

The table has been prepared on the basis of the following points of view:

(1) A Kokufu was removed according to the changes in the function of the provincial government.

(2) There are often found, near the 7th century Kokufu, the sites of temples built in the Hakuho(白鳳) era.

(3) As a rule, a Kokubunji temple was founded near each Kokufu in the middle of the 8th century.

(4) Kokufu were completed (as small towns based on a definite planning) about the middle of the 8th century.

(5) Generally, Kokufu in the 10th century were located along the highways shown in the Engishiki(延喜式).

(6) Some Kokufu situated on low-lying ground were destroyed by floods in the late 9th or early 10th century.

(7) The records on Kokufu in the Wamyosho(和名抄) show the general conditions in the early 10th century, while the records in the Irohajiruisho(伊呂波字類抄) show the state of things in the middle of the 12th century.

(8) After the 9th century, the place name Kokuga(国衙) indicates the location of a Kokufu, but after the 12th century, the name Fuchu(府中) is used instead.

(9) Sosha(総社) shrines were founded in the 10th or 11th century.

(10) Innyakusha(印鑰社) shrines were originated in the 12th century.

(Sosha and Innyakusha are the Shinto shrines closely related with Kokufu.)